

北国街道松代通り

川田宿ガイド用ブック

川田宿の沿革

若穂川田は、かつて北国街道脇往還松代通り（通称：谷街道）の宿場町として栄えた。

川田宿は、慶長 16 年（1611）に徳川家康の六男で当時この地の領主であった松平忠輝により設けられたが、それ以前から旅人を泊める家々があったと言われている。松代と福島宿との間に位置し、犀川が川止めになった時などは賑わい、「雨降り宿」とも呼ばれた。大水害にあい、元文 4 年（1739）に現在地に移転し、通りが「コ」の字型の典型的な宿場が誕生した。

本町通りの東西には秋葉社が祀られ、通りの真ん中に用水堰を通し、北側の中央に本陣・高札場、その向かい側に東から和泉屋・中屋・扇屋の旅籠が、上横町には口留番所が置かれた。

江戸時代の北国街道

中山道追分宿（軽井沢町）から金沢を結ぶ脇街道は「北国街道（北国往還）」と呼ばれる。

北国街道には、矢代宿（千曲市）から二分され、松代城下を通り、川田宿、福島宿（須坂市）、長沼宿を経て牟礼宿（飯綱町）に至る「松代道」と、矢代の渡しで千曲川を渡り、丹波島宿から市村の渡しで犀川を越えて、善光寺宿から牟礼宿に至る「善光寺道」が存在する。

天正11年（1583）に上杉景勝によって進められた北信濃の街道整備の際には、前者のルートが中心であったが、慶長16年（1611）に北国街道の宿駅設定が行われた時には、松代道とともに善光寺道の道筋も公認され、次第に繁栄する善光寺町を通る街道が主流となっていった。

北国街道は、善光寺や戸隠へ参詣する「信仰の道」、佐渡で産出した金・銀を江戸や駿府に送るための「佐渡金山の道」、加賀藩前田家や松代藩真田家などの「参勤交代の道」として用いられた。

一方の松代道は主に犀川の洪水による舟留めの時に迂回路として利用されたので、「雨降り街道」とも呼ばれた。

北国街道松代道の川田宿は、松代城下より北東2里（約7km）の位置に存在する。江戸時代前期には千曲川沿いに宿場が形成されていたため水害を受けることが多かったが、元文4年（1739）に従来より南へ約200間（約364m）移動した。

宿場は上横町・本町・下横町からなり、北に開かれたコの字状に形成された。上横町の街道入口には、松代藩の口留番所が置かれ、千曲川を渡る関崎の渡しや隣接する須坂藩との往来における人や荷物の改めを行った。本町通り中央には、用水路があり、防火用水、馬の飲み水、旅人のすすぎ水として利用されたという。



江戸時代における北信濃の街道

①故郷の駅 「信濃川田駅」



大正 11 年(1922)6 月 11 日河東鉄道(株)が河東線を開通させ、信濃川田駅が造られた。駅前通りには、郵便局など公共施設があり、バスやタクシーが発着し、一時は「川田の駅前通りには十文字の風が吹く」と言われた繁華街であった。当初は蒸気機関車であった河東線も昭和元年(1926)1 月に全線電化された。しかし、車社会の波には勝てず、平成 24 年(2012)3 月 31 日に廃線となった。構内は、昭和 20 年(1945)8 月 13 日の川田駅空襲で犠牲になった人の鎮魂の桜とも言える桜の幹も朽ち果て静まり返っている。

注) 川田小学校には、空襲の際の機銃掃射による銃痕が残る旧体育館の床板が保存されている。

注)「鎮魂の桜の木」…現在の桜並木の一部の木はこの木を受け継ぐ後世代の木だという。

河東鉄道・長野電鉄を創った神津藤平（明治4年・1871—昭和35年・1960）

佐久郡志賀村（現佐久市）の豪農・神津清三郎の二男として生まれる。長野電鉄の創始者であり、志賀高原の開発者でもある。慶応義塾に学び福沢諭吉の強い影響を受け卒業、村会議員、長野県会議員、村長などに就任。昭和26年長野電鉄社長となって電鉄網を完成、又観光にも力を入れ、沓野山一帯を「志賀高原」と命名し、スキー場の開放、丸池スキー場に日本最初のリフトを設ける。長野商工会議所会頭。第一回交通文化賞受賞。常に30年40年先を見越して仕事をした。



河東線の建設

大正時代に善光寺平東部地区の製糸業者たちが中心となり、資材・製糸などの貨物輸送のために始めた鉄道敷設運動がきっかけとなる。当時、千曲川や犀川の橋は十分ではなく、建設技術や費用面での問題が大きかった。このため埴科、上高井、下高井など千曲川右岸地域の結びつきはとても強かった。

また、松代・須坂・中野などの製糸業者は岡谷、上田などとともに横浜港を通じて世界の市場と結びついており、当時の日本の経営者の先をゆくものだった。

しかし、昭和恐慌、製糸・養蚕の経営悪化、第二次世界大戦などを経験する一方で、鉄道建設も進み、千曲川右岸としての経済的つながりは弱まっていく。河東線の変遷を見ると、千曲川右岸の経済と生活の変化が見えてくる。

河東線は、大正9年（1920）の河東鉄道株式会社設立後、わずか2年という短期間で開通した。今の時代では考えられないほどのスピード感を持った鉄道の完成だった。土地の手当ては、当時の屋代、松代、須坂をはじめとした各町村の役員に委託して始まり、沿線住民の協力が早期の鉄道開業を成し遂げた大きな要因であった。

河東線略年表

- 1920年（大正9年）
 - 佐久鉄道に屋代—須坂間の敷設免許交付（5/3）
 - 河東鉄道株式会社設立（5/30）
 - 佐久鉄道から河東鉄道に屋代—須坂間敷設免許譲渡（9/6）

- 1921 年(大正 10 年) 須坂－木島間、信州中野－湯田中間の敷設免許交付 (5/26)
- 1922 年(大正 11 年) 河東鉄道・屋代－須坂間 24.4 kmが開業 (6/11)
 屋代駅・東屋代駅・雨宮駅・岩野駅・松代駅・金井山駅・
 町川田駅 (後の信濃川田駅)・綿内駅・井上駅・須坂駅
- 1923 年(大正 12 年) 町川田駅が 「信濃川田駅」 に改称 (3/12)
 須坂－信州中野間が開業 (3/26)
- 1925 年(大正 14 年) 信州中野－木島間が開業 (7/12) ※屋代－木島間 50.4km
- 1926 年(大正 15 年) 全線が電化される (1/29)
 河東鉄道が長野電気鉄道を合併し「長野電鉄」となり、屋代
 －木島間が「河東線」となる。(9/30)
- 1951 年(昭和 26 年) 新駅「大室駅」開業 (11/13)
- 1961 年(昭和 36 年) 屋代駅－信州中野駅間経由で国鉄上野駅から山ノ内線・湯田
 中駅までの直通列車が運転開始 (5/1)
- 1962 年(昭和 37 年) 国鉄直通列車の通年運転開始 (3/1)
- 1963 年(昭和 38 年) 上野－湯田中直通列車を電車化 (10/1)
- 1966 年(昭和 41 年) 新駅「若穂駅」開業 (7/1)
- 1979 年(昭和 54 年) 貨物営業全面廃止 (4/1)
- 1982 年(昭和 57 年) **国鉄の直通急行「志賀」の廃止 (11/15)**
- 1993 年(平成 5 年) 屋代－須坂間と信州中野－木島間ワンマン運転開始 (11/1)
- 2002 年(平成 14 年) 信州中野－木島間が廃止 (4/1)
 屋代－須坂間を「屋代線」と改称 (9/18)
- 2012 年(平成 24 年) 屋代線 全線廃止 (4/1)

1945 年 8 月 13 日の長野空襲

〈概要〉

長野市は、太平洋戦争勃発以来敗戦の末期まで、B29 等が市街地に接近あるいは市街地上空を通過の時、「警戒警報」または「空襲警報」が発令されただけで、実際の空襲を受けることなく過ぎていた。

しかし、戦況が押し迫った昭和 20 年(1945)8 月 13 日の未明から夕方まで、艦載機の編隊により数回にわたる空襲があり、主として長野飛行場、国鉄長野駅機関区(庫)を中心に、機銃掃射・ロケット弾の攻撃を受けた。

この空襲による被害については、被災当時、地元の新聞やラジオ・雑誌等でも報じられたが、例えば死亡者数でもかなりの差があり、不確かであった。その後、民間団体による聞き取りなど詳細な調査が行われ、長野市の犠牲者は 46 人(「長野が空襲された」長野空襲を語り継ぐ会編 昭和 62 年(1987)発行)とされている。

〈経過〉

- ①午前 6 時 50 分頃 . . . 長野飛行場を銃撃
駐機中の練習機、数十機が破壊される。
- ②午前 9 時前後 . . . 4 回にわたり飛行場付近を攻撃、近くの河合新田・松岡地区
の民家にも爆弾が落とされた。
長野機関区も正午までに 3 回にわたり銃撃を受けた。
- ③午後 0 時前後 . . . 松代町の民家に爆弾投下
正午頃、若槻の国立傷痍軍人長野療養所（現東長野病院）
にロケット弾投下と銃撃
国鉄篠ノ井駅東側民家にロケット弾投下、近隣民家に機銃
掃射
- ④午後 1 時 30 分頃 . . . およそ 8 機の編隊で、4 回にわたり長野市西南方向に銃爆撃を
行う。
- ⑤午後 3 時 30 分頃 . . . 5～6 機が長野電鉄河東線信濃川田駅を銃撃、5 人が負傷、
3 人が犠牲となった。また、地区の民家や小学校などの屋根
が損傷した。
6～9 機が国鉄篠ノ井駅周辺を 4～5 回にわたり銃撃し、駅や
民家の屋根などが損傷した。

黄金山の上空から川田駅へ向かって飛行し、機銃掃射した。

〈被害〉

- ・犠牲者は死者 46 人
- ・主な空襲場所は、長野飛行場、長野駅周辺（長野機関区）、傷痍軍人長野療養所（現東長野病院）、国鉄篠ノ井駅、長野電鉄信濃川田駅などであった。

②一里塚



下横町から綿内方面への街道の出口に、街道の里程を示す一里塚があり（現在は国道 403 号線沿いにある）、旅人の目安とされていた。正保 4 年（1647）の絵図には「綿内までは 25 町（2.8km）」と記されている。文化 11 年（1814）川田宿へ着いた第 8 次伊能忠敬測量隊一行 18 名は、この一里塚から東にある領家・高橋地籍の保科川の堤防を経て、千曲川、犀川、落合、牛島の道筋の測量を行っている。

注）町川田の一里塚は、町下 3221 番地にあつて旅の目安とされたが、それらしい姿は見当たらない。旧標柱の位置は、昭和 37 年（1962）に宿絵図から算定され建立された。その後、道路拡幅に伴い、国道 403 号線沿いの現在地に移転し、平成 9 年（1997）の市制百周年記念事業により新しい史跡標柱が再建された。

一里塚とは

一里塚(いちりづか)とは、大きな道路の側に1里(約3.927キロメートル)毎に旅行者の目印として設置された塚(土盛り)である。

中国を起源とするが、日本では古代における国境の標を一里塚の始まりとする説もある。秀吉は五間四方の塚を36町一里として一里塚を築いたが、一般的には徳川氏の制度をさす。家康は秀忠に命じて慶長9年(1604)江戸日本橋を起点として東海道、東山道、北陸道に榎木を植えた一里塚を築かせ全国に普及させた。榎木は根が深く広がって塚を固め崩れにくいことにあった。榎木の代わりに松の木などを植えた地方もある。一里塚は旅人にとっては里程の目安、乗り賃支払の目安、また日差しの強い日には木陰の休み所ともなった。

伊能忠敬(延享2年・1745-文化15年・1818)

江戸時代の商人・測量家。洋学の科学的な理論に基づき、沿岸の実地測量から精密な日本地図「大日本沿海輿地全図(だいにほんえんかいよちぜんず)」を作成した。

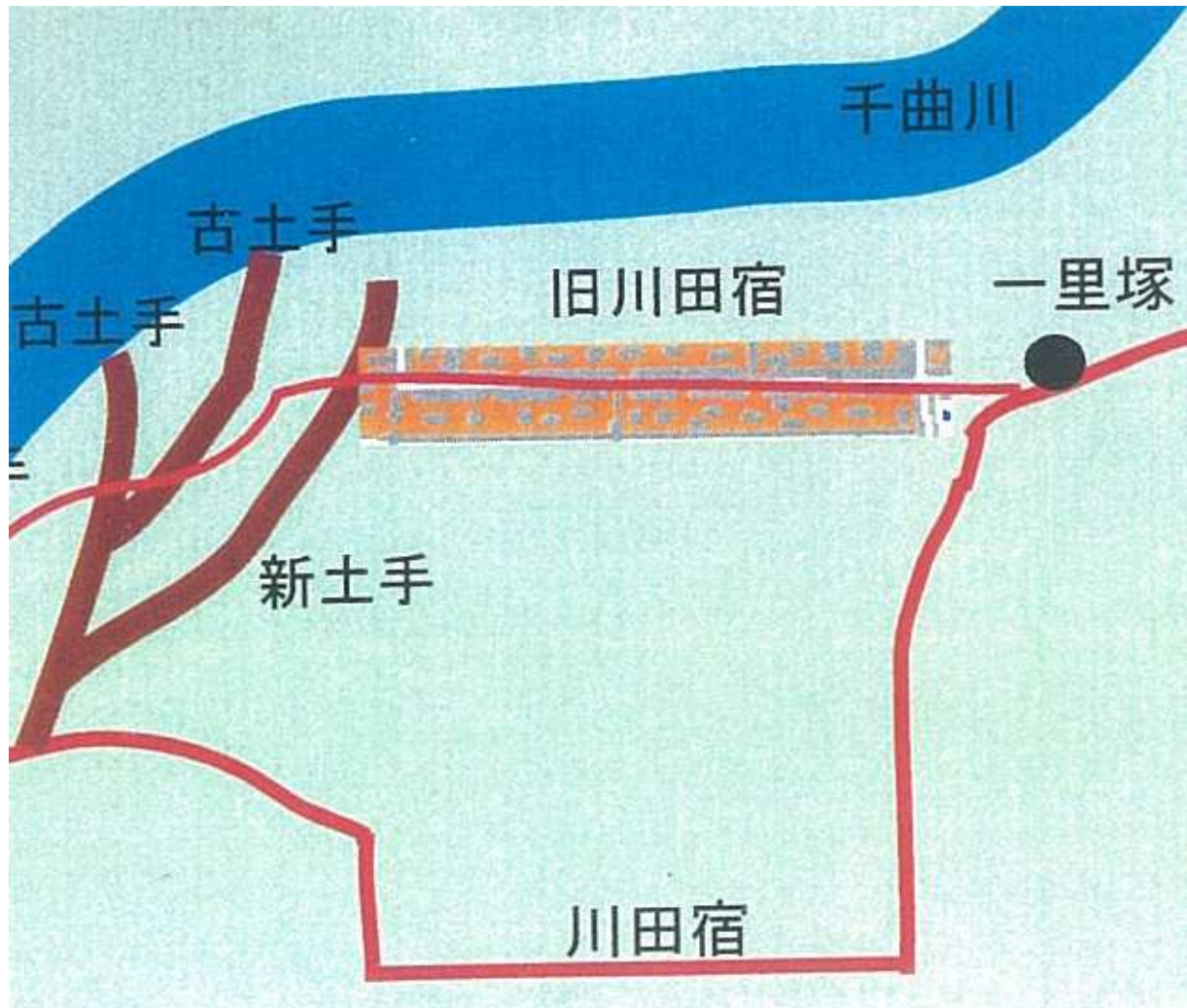
延享2年(1745)、上総国山辺郡小関村の小関家に出生。宝暦12年(1762)、18歳のとき、下総国佐原村の豪家であった伊能家に入婿し、忠敬と名乗る。そこでは酒造や地主経営のほか、米穀・薪の取引、店貸し、金融、運送などの諸事業を展開し、家産を拡大した。また、村役人として天明飢饉(天明2年・1782-天明8年・1788 浅間山の噴火)の状況下、貧民救済や利根川の洪水対策の堤防修築などに尽力し、その功績から苗字帯刀を許され、士分格(正規の武士身分を持った者)となった。

寛政6年(1794)家督を譲ると、翌年、江戸深川黒江町に居を移し、幕府天文方の高橋至時(よしとき)に師事、自宅に施設を整えて天文観測を継続した。

寛政12年(1800)、幕府の命を受けて蝦夷地(北海道)の測量に入り、文化13年(1816)までの17年をかけて全国を測量、10次にわたって日本全国の沿岸を実地測量した。その成果は、『大日本沿岸輿地全図(通称：伊能図)』としてまとめられ、日本史上初めて国土の正確な姿を明らかにした。



③旧川田宿（古町宿）



松代藩から宿場指定を受けた最初の宿場「古町宿」は、現在地から 400m 北にあったが、度重なる千曲川の洪水の被害に遭い、藩の許可を得て、元文 4 年（1739）から約 30 年をかけて現在地へ宿場を移転した。こうした水害などからの宿場の安泰と鎮護を願って、古城山（川田宿を見下ろす南側の山）へ虚空蔵菩薩を建立した。貞享元年（1684）の宿控帳には「家数 82 軒、馬数 47 疋、旅籠 71 軒、宿場の長さ 5 町（約 500m）」と記されている。

古町宿から新町宿建設へ

川田宿の古町宿は千曲川に近かったため、幾度となく水害に見舞われた。特に元文3年（1738）は、千曲川が7度も氾濫し、田畑や家屋敷の流失が多く、壊滅的な打撃を受けた。止む無く新町宿建設の許可を得て、元文4年（1739）から現在地への移転が進められた。漸く建設に取りかかった矢先の寛保2年（1742）には、千曲川未曾有の大洪水「戌の満水」に襲われた。困難が続きながらも、町並を整え、宿場の機能が回復するまでには30年の歳月を要したといわれる。新町宿を見下ろす古城山山頂に、新宿場の安泰と鎮護を願って建立されたと伝えられる虚空蔵菩薩の石祠には「明和八年（1771）三月十三日村中」と記され、宿場の人々の30年に及ぶ苦難と喜びの跡が刻まれている。

虚空蔵菩薩は、無量の智慧や功德を蔵する菩薩と言われ、「虚空」は何ものにも打ち破られない、「蔵」は全ての人々に利益と安楽を与える宝を収める、という意味を表しているという。



主な水害の記録

○元禄 11 (1689) 年

○享保 6 (1721) 年

○享保 16 (1731) 年

○元文 3 (1738) 年 の満水

この時、問屋三郎兵衛・肝煎重介ら6人の名で宿場移転と移転のための財政援助を願い出る。内容は以下のとおり。

- ・西町、東町の水田に新たに町割りさせてもらい、町割りの場所は半高にしてもらいたい。
- ・家の引越し代に270両を拝借したい。
- ・御田地のうち「御入り下げ」200石をいただきたい。
- ・馬の飼料代として75両拝借したい。

○寛保 2 (1742) 年 「戌の満水」

現在の川田宿

北国街道の宿場町として設けられた川田宿は、典型的な「コ」の字型で存在し、昔の宿場町の面影を良く伝えている。

昭和63年、国道403号バイパス工事が完成し、車の流れが変わった宿場内には、平成19年に歴史的な宿場の道として、景観に配慮した近代的なアスファルト舗装の石畳が完成し、新しい宿場の景観が蘇っている。

ゆるやかに裾野がのびる黄金山の緑の山なみを背に、古い宿場町と新しい宿場町の家並が軒を並べて広がる本町通り中央には、宿場のシンボル御高札場に寄り添うように「町川田藩」の案内板が迎えています。

「川田宿へようこそ 心静かに心配ごとなく ごゆっくり散策して下さい」

川田宿の各通りは、次のとおりである。

- ・下横町 長さ九五間四尺(約174m)・幅四間(約7m)
- ・本町 長さ二〇一間二尺(約365m)・幅七間(約12.7m)
- ・上横町 長さ五九間二尺(約107m)・幅(約7m)

道に面した両側の屋敷は細かく地割され、最大間口二五間より最小三間半まで様々である。本町に比べ横町が小割で七・五間から五間程度が多い。下横町では小百姓分として二八間を八人で割って平均三・五間である。奥行も様々で最大三〇間から二八・五間で揃っている。大きな家は本町の中央に集まっていた。本町には道の中央に一間二尺の堰が貫流し、そこへ横に数本の堰が作場道に沿って続いている。これは、どこの宿場にも共通なもので、防火用水であり、馬の飲み水、旅人のすすぎ水や生活用水として利用された。宿場当時、用水の縁には松が植えられていたといわれる。

④古町庚申塔



かつての古町宿の土中から発見され、下横町入口の現在地に再建されたと伝えられるこの庚申塔には、「宝暦 11 年(1761)川田宿講中、謹立」と刻まれている。たび重なる洪水を避け、現在地に古町宿が移り終えるまでには約 30 年もの歳月を要した。漸く念願を果たしつつある宿場の人々が、改めて延命、治病の功德と併せ新しい宿場の無事を願って旧地に近いこの地に建立された悲願の塔であったかも知れない。

注) 庚申塔が再建された宝暦十一年は、奇しくも元文四年から二十余年に当たります。

注) 高さ 1 メートルの自然石の文字碑の庚申塔には川田宿最古の銘が刻まれている。

庚申信仰について

干支の庚申の日にかかわる信仰。庚申信仰の来歴は明らかでないが、古代中国で行われ日本でも平安時代に貴族や僧侶によって庚申待が行われた。信仰内容には道教の色が濃く、庚申の日に寝ると人間の体内にいる三尸（さんし）という三匹の虫が身体から抜け出て、天帝にその人間の罪過を報告に行くので、眠らずに過ごすという説明が流布してきた。中世には武士や農民に広がり、室町時代には非常に盛んになった。近世になり全国的に庚申講が組織され、庚申塔が建立されるようになった。庚申の申を猿とし、猿を神の使いとする山王信仰と結び付けられ、近世前期には仏教上の青面（じょうめん）金剛が三尸を抑え込む神として、信じられるようになり庚申塔にもつばら憤怒相の青面金剛が彫られるようになった。さらに、庚申を猿田彦と解釈する神道的な解説も登場した。仏教および日本の民俗信仰が習合して多様な庚申信仰ができあがったが、そうした違いは意識されず、いずれも単に「庚申様」として祀られ、無病息災や長寿など現世利益の信仰を集めた。

町川田の庚申講について

川田宿には庚申塔が2基（下横町・古町庚申塔／黄金山道沿い斜面）がありますが、町川田でもかつては「庚申講」が盛んに行なわれていました。

町川田には4組の講中があり、最近まで毎年1回、2月23日の午後4時ごろから、当番を務める家に集まり、「青面金剛像」の掛け軸を掛けお供え物をして午前2時ごろまで皆でお祈りしながら、いろいろと語り合っていた、と言います。

時代の流れでこの頃では、講中同志の家に葬儀があればお線香にいく程度しか行なわれなくなってしまいましたが、今でも午後7時頃から集まってご本尊さまの前でお茶を飲みながら語り合う仕来りで続いている組もあるそうです。

⑤道祖神



黄金山（古城山）入口の
道祖神



文化 10 年(1813)11 月と刻まれた双体祝言像の道祖神は、下横町の出入口に祀られている。神話の天孫降臨に、夫婦相和して道案内の大役を務める猿田彦命(さるたひこのみこと)と雨鋤女命(あめのうずめのみこと)の雲上束帯の相愛像と言い、一名「雲に乗った道祖神」の愛称も聞かれる。なお、下横町の庚申塔脇には古式の双体像道祖神 2 基が並び、上横町出入口の黄金山麓には、「道祖神」と彫られた文字碑の道祖神が宿場を見守るように祀られている。

注) 町下横町の祭典連(15 才~30 才)は毎年 10 月 8 日町川田神社の例大祭にこの雲に乗った道祖神と並んでいる二十三夜塔、本町通り入口の秋葉社の祭りと続けている。

道祖神について

多くは村境の道路傍に立てられている神で、村落を疫病や厄災から守る神とか、旅の安全を守る神のように考えられている。陰陽石の形をしたものや男女双体像のものが多い。「さえの神」とか「道ろく神」などと呼ばれている。民俗における道祖神には奇妙な伝承が付帯しており、男女双体像の男女とは、実は兄と妹で近親婚の禁忌を犯した二人だという。石像の神が一般的であるが、藁人形などの神もあり、安置されるタイプとどんど焼きなどで焼かれるタイプもある。

二十三夜さまのお団子配り

双体道祖神と並んで二十三夜塔が建てられている。ここでは、毎年4月23日と9月22日に下組の人々により、二十三夜さまのお祭りが行われている。祭りを取り仕切るのは下組の若者からなる祭典連(さいてんれん)である。祭りの当日、二十三夜塔や道祖神に注連(しめ)を張り、神官から御幣(ごへい)を受けてくる。また、二十三夜塔前に二本の幟(のぼり)と提灯をあげる。その頃、下組の家々ではお団子を作り箱に詰め、二十三夜塔前に供える。(※近年ではお団子を作る家数が減ったので、菓子袋で対応)日が暮れて提灯に明かりがともる頃になると、二十三夜塔前に袋を手にした子ども達が配られるお団子やお菓子を貰いに集まってくる。昔に比べて子どもの数が減ってしまったが、めいめいの家で作られたお団子をわれ先にと貰う姿は今も昔も変わらない。お団子はそのあと、北の庚申塔の前でも配られる。お団子を持って移動する係のあとをついていく子ども達はカルガモのひなのようにほほえましい。お団子は少し塩味がついている程度のものだが、これを食べると風邪をひかないという。お祭りで団子をもらった子ども達が成長し、今度は配る側となる。こうした、年に二回のお団子配りを通じて祭りは次の世代に伝えられている。

二十三夜とは

月待信仰の1つ。十三、十五、十七、十九、二十三、二十六など月齢の夜に人々が集い、月の出を待って供物を供え、観音経を唱え、安心立命、無病息災を祈った勤行や飲食を共にする古い風習である。現在でも、中秋(旧暦の8月15日)の「十五夜」は多くの地方で行なわれている。「十五夜」は一般的に名月を鑑賞する日と考えられているが、日本では古くから、月光には神霊が宿っており、満月を豊穰のシンボルとして崇拝していた。天照大神を「日の神」、月読命を「月の神」と崇めていた。

場所によっては「二十三夜塔」という石碑が建てられ、特に関東地方や長野県に多くみられる。二十三夜様は「三夜待ち」「産夜」とも呼ばれ、女性の講だとされている。また、子どもの神様で「月読神社」は子どもに恵まれない夫婦がお参りすると子宝に恵まれるといわれている。旧暦の二十三夜は、満月ではなく「下弦の月」となり、真夜中に東の空に昇る。昔の人はその月に何かしらの神秘性を感じていたものと考えられる。

⑥秋葉社



川田宿本町通りの東西両端には町を見守る様に火伏せ神秋葉社が祀られている。江戸時代後期の作と伝えられる下横町の秋葉社は、長大な自然石の竿石の中に一本の柱を埋め、その上に方 1 メートル程の木造流れの造りで、見事な龍・唐獅子・象などの精巧な透彫りの彫刻が施された社を載せている。この社は善光寺山門の造営にも関係した高井の名工、亀原和田四郎の作と伝えられている。



川田の秋葉社

川田宿には四基の秋葉社があり、本町通り東西両端のほか、関崎常夜燈の横と国道403号線沿いに石造りの秋葉社がある。

いずれも人々の深い信仰の証であるとともに、多くの人々によって守り伝えられている貴重な文化遺産の社である。



国道 403 号線沿い



関崎橋 常夜燈横

秋葉社と秋葉信仰

秋葉山は静岡県浜松市春野町にある山（885メートル）で、秋葉信仰の中心地である。山上には、秋葉山本宮秋葉山神社があり、祭神は火之加具土神（ほのかぐつちのかみ）、秋葉山三尺坊大権現である。

三尺坊は実在の人物で、戸隠(岸本家)の生まれとされている。4歳にして新潟県の蔵王権現堂へ修行に行き、10歳の時、戸隠の父の元に戻った。26歳の時、比叡山の千日回峰行を終えて大阿闍梨(だいあじゃり・規範を伝授する指導者)となり、蔵王権現堂十二坊のうちの第一である三尺坊に住持を務めた。27歳の時、真言秘密不動三昧之法を取得し、人間七難八苦のうち、火難を救うべく身火心火の術と悟りに至ったとされている。その後諸国を遍歴して教えを説いたが、最終的に今の静岡県春野町に脚を留めてこの山を愛し、火坊の大魔神力をもって人々の火難を救ったという。不動明王の化身とされ、白狐に乗って神風のごときスピードで移動すると言い伝えられている。

※権現とは、かつて人間であった人が、そのあまりに超人的な力量のために、構成の人に神としてあがめられることをいう。

秋葉信仰は、火防火伏せの信仰として全国的に分布している。特に関東・中部地方で濃厚である。各地の秋葉山はここから分祀したものといえる。秋葉講中あるいは代参・月参講中が結成され、秋葉山への参詣も盛んである。

秋葉山では秋葉山・秋葉神社(三尺坊大権現)とともに12月15・16日に火祭りを行っている。秋葉神社では16日の大祭に弓・剣・火の舞が行われる。

高井の名工・亀原流

亀原流は江戸時代、主に高井地方を中心に寺社建築や彫刻を残している流派である。

初代・亀原和太四郎嘉重（よししげ） 延享元年（1744）～文政元年（1818）

- 作品 ① 須坂芝宮鏡台彫刻（安永元年・1772）
② 高山村 高社神社本殿（天明3年・1783）
③ 高社神社鳥居〔再建〕（天明8年・1788）
④ 須坂墨坂神社本殿弊殿（寛政5年・1793）
⑤ 井上浄運寺彫刻及び釈迦堂（寛政6年・1794）
⑥ 高山村浄教寺（寛政8年・1796）
⑦ 墨坂神社随神像（寛政10年・1798）
⑧ 高山村久保田家天神本社及び本屋（寛政12年・1800）

二代・亀原和太四郎嘉博（よしひろ） 寛政10年（1798）～明治3年（1870）

初代・嘉重の孫、初代の長男・武平太の養子（妹の子）

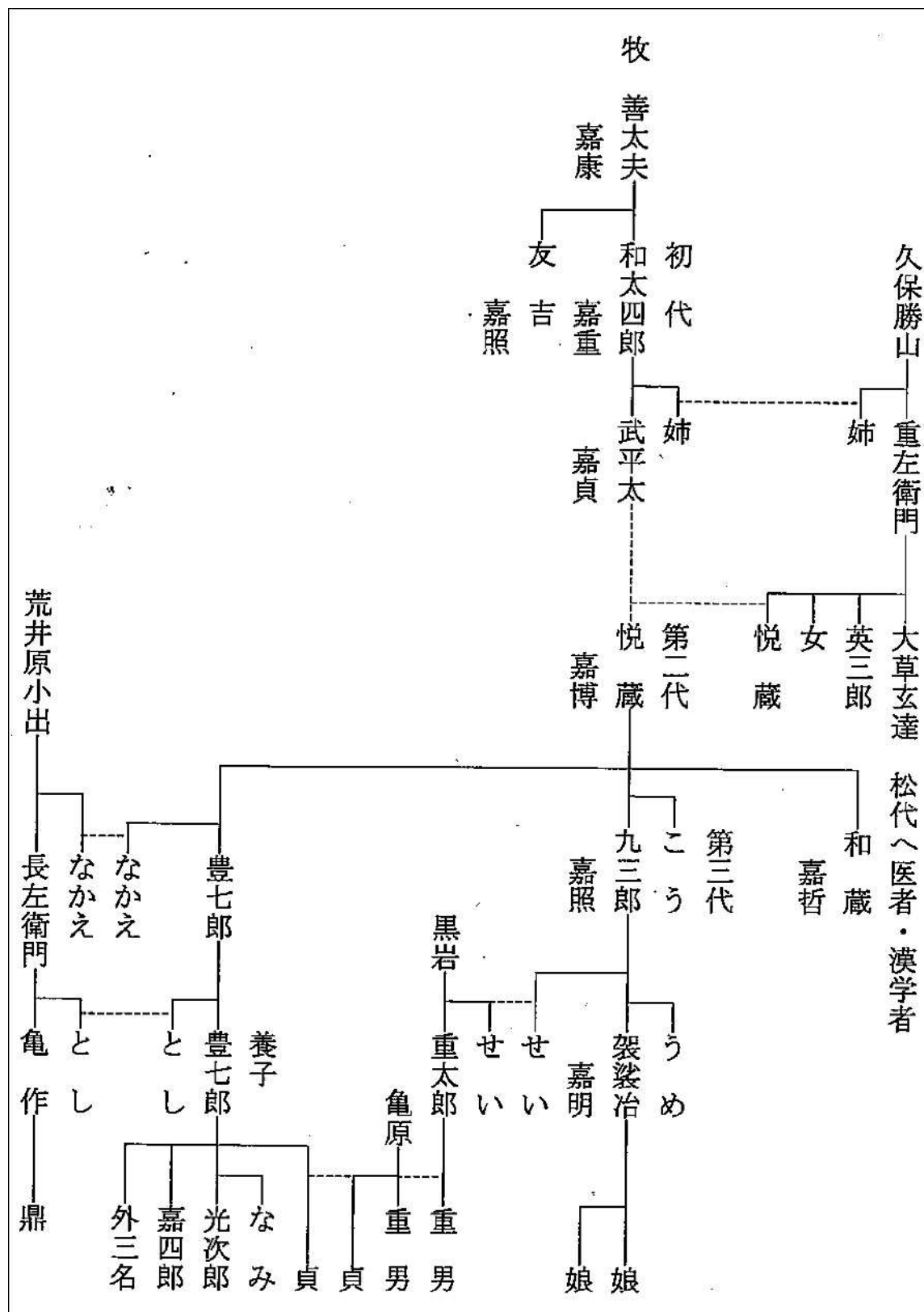
- 作品 ① 小布施町の祭り屋台彫刻（弘化3年・1846）
② 高山村高社神社中宮 再建（弘化4年・1847）
③ 須坂南原普願寺鐘楼（嘉永4年・1851）
④ 須坂沼目福正寺薬師堂（嘉永6年・1853）
⑤ 高山村蕨平諏訪社本殿（安政元年・1855）
⑥ 須坂春木町浄念寺本堂（安政2年・1856）
注）山岡平左衛門との合作
⑦ 須坂横町芝宮本殿 墨坂神社（安政6年・1859）
⑧ 同神社水屋（安政6年・1859）
⑨ 須坂常盤町奥田神社本殿（安政6年・1859）
⑩ 須坂相之島神社鳥居（文久2年・1862）
⑪ 高山村荒井原 恵比寿大黒像（元治元年・1864）
注）小出鼎氏所蔵 小出氏祖母は二代目和太四郎の娘
⑫ 須坂米子東寺照寺本堂（文久3年・1863）

三代・和太四郎嘉照（よしてる） 弘化3年（1846）頃～大正10年（1921）頃

二代・嘉博の息子。大正8年、生家が全焼し、多くの文献が焼失してしまったため、詳細不明。

- 作品 ① 須坂常盤町奥田神社拝殿（明治中期以後）
② 須坂横町芝宮祝詞殿（明治39年・1906）
③ 須坂臥竜山南麓興国寺山門（大正6年・1917）

〈亀原一門 系図〉



出典：田子昭治 著『信濃の名工 亀原和太四郎』より

⑦学林寺



学林寺本堂跡に建てられた町川田公民館の床の間には、高さ 68 cm 重さ 18 kg の見事な雌雄一対の鯨瓦が飾られている。この瓦はかつて栄えた巖松山学林寺の名残である。神社寺院明細帳によると東光寺の末寺と伝えられ、「上杉謙信陣中作仏」と記された高さ 2 尺 8 寸（約 85 cm）の本尊が祀られていた。現在謙信ゆかりの仏像・仏具の一切は、本寺の東光寺に移されている。なお、学林寺は、代々の住職によって寺子屋が開設されていた。

かつての学林寺

巖松山学林寺は、古城山の山裾に位置する、曹洞宗医王山東光寺の末寺と伝えられ、創建間もない宝暦年間（1751～1764）から明治5年にかけて、歴代住職により寺子屋が開設されていた。町川田村をはじめ、牛島村・保科村、大室村など近隣の村のほか、遠くは井上、中島村からも多くの子弟が寺の門をくぐり学んでいた、という。

寺院としては、明治初めの「廃仏棄釈」で廃寺になってしまったが、昭和63年（1988）に現在の「町川田公民館」が建設されるまでは、寺院の棟東西の両端には鯢瓦が乗り、堂々とした建物であった。入口左側には赤地蔵が祀られていた。終戦後は、青年団の会合などに利用され、境内は芝居小屋が掛けられたこともあり、青年団の男女による敬老会や演芸会なども盛んに行われていた。

宿場の南、黄金山には、かつて学林寺境内に祀られていた、稲荷社、北向観音、天神社がある。



『川田村誌』より

学林寺 東西拾五間、壱尺八寸 南北八間三尺 面積四畝拾歩 曹洞宗東光寺の末派にして西部にあり 天和元年（1681）十月 僧 要禪創建す という。

⑧史跡「御高札場」



松代藩は高札場を設け、領民に守るべき掟、御条目、禁令を高札に掲げ周知徹底を図った。高札には「定」の永世不易の法と「覚」の一時的な法を掲げた。川田宿御高札場は昭和 37 年(1962)に、慶応 4 年(1868)太政官布告の太政官札 3 枚が発見された際に復元建立された。平成 2 年から風食を防ぐためレプリカを掲示している。上段に「覚」外国人迫害禁止令。下段右に「覚」阿片煙草禁止令。下段左に「定」徒党禁止令の札が掲げられている。

注) 高札とは、江戸時代に幕府、藩が法令を一般に知らしめるため、板札に墨書して町、村の高札場に掲示したもの。高札場は札場(ふだば)ともいい、城下町では町の辻橋のもと、村では村役人宅の前や村の中心、渡船場など人の集まる場所に設置された。松代藩では天和 2 年(1682)松代城下、善光寺など人通りの多い 41 ヶ所に高札場を設置した

※「定」札・・・永世不易の法を対象としたもので永久掲示

※「覚」札・・・一時的な法を対象にし、改廃の都度、取替えていた

発見された3枚の太政官札

昭和37年(1962)に、旧本陣門の天井裏から、慶応4年(1868)太政官布告の高札3枚が見つかった。

発見を機に高札場を復元整備、当初は高札板原本であったが、風食が激しかったため、平成2年からはレプリカ板を掲示している。

原本板は、町川田公民館に保管されている。

〈読み下し文〉

①上段の「覚」 外国人迫害禁止令札

覚

今般 王政御一新に付き 朝廷の御條理を追ひ 外國御交際の儀 仰せ出され諸事に於て 朝廷直に御取り扱い成させられ、萬國の公法を以て條約御履行被爲在らせられ候に付いては全國の人民 叡旨を奉戴し心得違い之れ無き様 仰せ付けられ候、自今以後猥りに外國人を殺害し或は不心得の所業等いたし候ものは 朝命に悖り御國難を醸成し候のみならず、一旦 御交際 仰せ出され候各國に對し 皇國の御威信も相立ざる次第、甚以て不届至極の儀に付き、其の罪の輕重に随ひ士列のものと雖も、土籍を削り至當の典刑に處せられ候條銘々、朝命を奉り、猥りに暴行の所業 之れ無き様 仰せ出され候事

慶応四年三月

太政官

②下段右の「覚」 阿片煙草禁止令札

覚

阿片煙草は人の精気を耗し、命数を縮め候品につき、兼ねてご条約面に之あり候通り、外國人に持ち渡し候事嚴禁の處、近頃、密かに船載の聞こへ之あり、万一世上に流布致し候ては、生民の大害に候間、売買の儀は勿論一己に吞用候儀、決して相ならず候、若し御制禁相犯し他より顯るに於いては、厳しく科められるべき候間、心得違い之無き様末々に至る迄堅く相守る者也

(右御達し書、府藩県一同高札に掲示致すべき様仰せ出され候事)

慶応四年閏四月

太政官(原文のまま)

③下段左の「定」 徒党禁止札

定

何事によらず、よろしからざることに大勢申し合わせ候を「ととう(徒黨)」と唱へ、とどうして強(

し)いて願ひ事くわだつるを「ごうそ(強訴)」といひ、或は申し合わせ、居町居村をたちのき候を「ちょうさん(逃散)」と申す。堅く御法度たり。若し右類の儀、これあらば早々其の筋の役所へ申し出べし、御ほうび下さるべく事

慶應四年三月 太政官

右の

仰せ出の趣、相守るべきもの也

長野縣廳

松代騒動について

戊辰戦争(1689 年)当時、松代藩は日本有数の軍事力を持っていました。1872(明治 5)年、上田城の東京鎮台第 2 分営より乃木希典少佐が、廃城の松代城と武器を受領すべく来迎。その時、「松代藩は大砲のみにて 53 門の多きに達し、他の 10 藩全部の兵器を合するといえども松代藩の足元にも及ばず」と言ったとされる。10 代藩主・真田幸民と佐久間象山により最新の洋式装備化を進められていた(大砲の試し打ちで倉科の生萱から試射した弾が、一重山を超えて 満照寺まで飛んで大騒動)。しかし、戊辰戦争への参加で財政は悪化。財政再建のため、1869(明治 2)年、「商法社」という会社を設立、生糸・蚕種の生産・販売、午札(紙幣)の発行を始めたが失敗。その穴埋めをすべく増税したために民衆が決起して「松代騒動(午札騒動)」が勃発、幸民も謹慎処分を受けた。(その後伯爵になっている)。

⑨川田宿本陣・問屋／西沢邸



川田宿の本陣・問屋は、当初から西沢家がその重責を務めてきた。本陣で宿泊、休憩した大名は松平加賀守、松代藩主、須坂藩主他多数で、測量家の伊能忠敬も立ち寄った。大名通行の際は、道路の清掃、人馬の用意、出迎え、献立、献上品などで多忙を極めた。問屋としては、伝馬人足の継立、千曲川通船の商品物資の取り扱いをして、船荷は問屋の荷蔵に積み込まれた。長屋門には見事な松代藩の六文銭が取り付けられていたが、第二次大戦で供出され、今はその跡を僅かに留めているのみである。

※西沢家には数多くの古文書が残されており、現在、長野県歴史館で保管され、調査整理が進められている。

※長屋門・・・武家屋敷や豪農の家などに見られ、両脇の屋根の間に開いた門。門番所などを兼ねた門でした。

※さや屋根・・・土蔵の屋根を保護するため、屋根の上に更に覆った合掌型の屋根の形

宿場の本陣と脇本陣

本陣は、天皇の使者である勅使(ちよくし)や公家・大名、公用で旅をする幕府役人などが宿泊するために設けられた施設である。本陣だけに宿泊ができないとき、予備にあてた宿舎が脇本陣である。

「本陣」と呼ぶのは、宿場に大名が小休止または宿泊するとき、「陣を張る」という意味で「仮の出城」といわれるほど重要な施設であったことに由来している。

本陣と脇本陣は一般の旅籠屋と違い、門、玄関、書院を設けることができた。本陣を務める家柄格式については、「苗字帯刀御免」の家柄であることやまた豪農、豪商の資産家であることが挙げられていた。

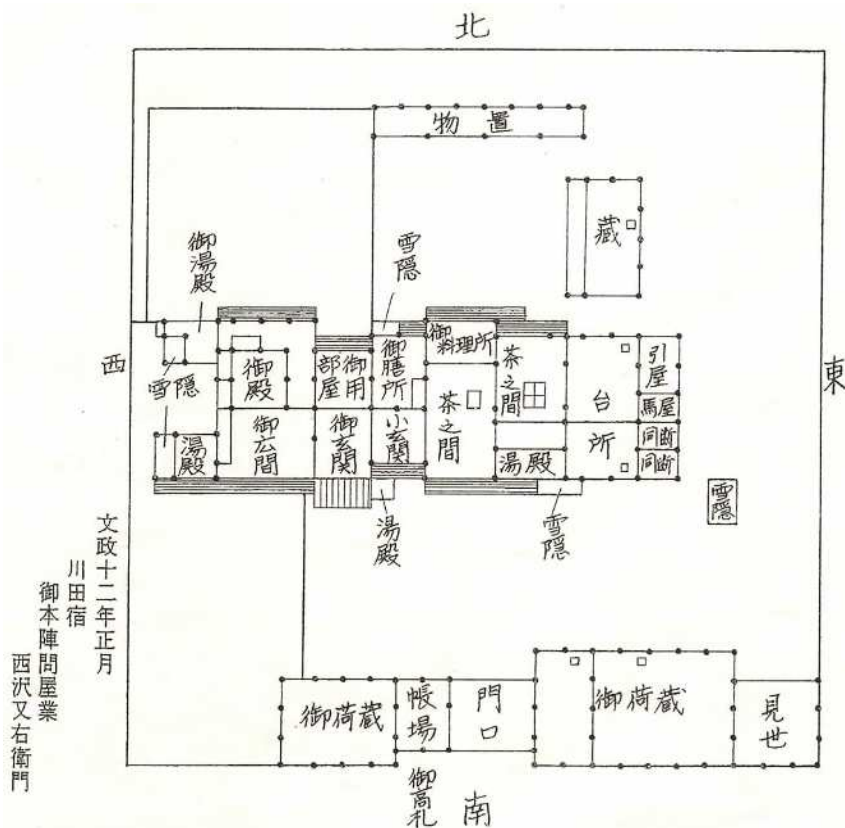
本陣は宿泊施設の中でもっとも権威のあるもので、今でいう高級旅館にあたるが、特定の身分の人だけが宿泊できたというのはあくまで原則であって、時として一般の旅人が宿泊することもあった。しかしそれも頻繁に宿泊させるわけにはいかず、経営的にはとても苦しかった。また、脇本陣には一般の旅人も宿泊することができたが、本陣より格が一段下がるものだった。

参勤交代などで大名が宿泊するときには、重ならないように前もって調整がされたが、川留めなどで重なったときには、先に本陣に入った大名よりも後からきた大名の方が格上の場合、本陣を明け渡すこともあった。

さらに本陣や脇本陣で不足が生じたときは、宿場内の寺院が本陣の代用とされることもあった。

〈 川田宿本陣 〉

平面図



川田宿に立ち寄った大名家

川田宿では、一貫してこの「西沢家」が本陣・問屋の重責を務めていた。本陣への宿泊、休息の大名は、加賀藩主、越後高田藩主、松代藩主、須坂藩主などであった。

加賀藩の参勤交代

金沢から江戸に至るルートは三つあった。そのほとんど(190回のうち181回)は 金沢→越後高田(北陸道)→信濃追分(北国街道)→江戸(中仙道) というルートだった。

「北国下街道」と呼ばれたこのルートの場合、江戸までの距離は百十九里(約480Km)で、所要日数は12泊13日というのが一番多く、一日当たり十里(40km)を歩いたことになる。

加賀藩の参勤交代行列の人数は、五代藩主の時の4,000人が最大で、その後は3,500人から2,500人と減ったが、行列の長さだけでも2キロという日本一大規模なものだった。1回当たりの費用も、現在の金額にして5億円を越えるともいわれ、藩財政にとっても大変な負担だった。

参考：上街道東海道経由(金沢→福井→尾張→箱根→江戸)約600キロ

上街道中山道経由(金沢→福井→美濃→追分→江戸)約660キロ



伊能忠敬測量隊と川田宿

西沢家の古文書によると、伊能忠敬（1745-1818）の第8次測量隊（19人）は、文化11年（1814）の4月20日、善光寺から飯山、須坂を巡り、川田宿に到着し、ご本陣で昼食をとった。「賄献上覚書」には、「氷豆腐・焼き鶉（うずら）、卵、干びょう、竹の子、爛酒（かんざけ）、焼豆腐、焼鯛、長芋、大椎茸、蓮根、御飯」を供した、と書かれており、はなはだ上機嫌で松代城下へ向かって行った、とある。

第8次測量隊は、文化8年（1811）11月25日に江戸を出発し、同11年（1814）5月23日に帰着しており、川田宿には、測量の終盤に立ち寄ったことになる。この調査では、延べ914日間、実に13,083キロという長丁場を踏破している。

測量隊については、幕府老中から若年寄を通して先触れの伝達がなされた。

その内容は次の通りであった。

- ・人馬を提供すること ・測量機器を運搬すること
- ・土地の地理を案内すること ・一汁一菜の他、馳走は無用

松代騒動と川田宿について

戊辰戦争（1869年）当時、松代藩は日本有数の軍事力を持っていました。1872（明治5）年、上田城の東京鎮台第2分営より乃木希典少佐が、廃城の松代城と武器を受領すべく来迎。その時、「松代藩は大砲のみにて53門の多きに達し、他の10藩全部の兵器を合するといえども松代藩の足元にも及ばず」と言ったとされる。10代藩主・真田幸民と佐久間象山により最新の洋式装備化を進められていた（大砲の試し打ちで倉科の生萱から試射した弾が、一重山を超えて満照寺まで飛んで大騒動）。しかし、戊辰戦争への参加で財政は悪化。財政再建のため、1869（明治2）年、「商法社」という会社を設立、生糸・蚕種の生産・販売、午札（紙幣）の発行を始めたが失敗。その穴埋めをすべく増税したために民衆が決起して「松代騒動（午札騒動）」が勃発、幸民も謹慎処分を受けた。（その後伯爵になっている）。

松代騒動は明治3年（1870）11月25日に更級郡上山田村から起きた農民騒動である。一揆を起こした農民は石代相場7俵に戻すことや松代藩札（午札・松代藩が設立した商法社の発行した藩札）と政府紙幣との等価交換などを要求して松代城下に押し寄せた。

群衆の一部はこの川田宿にも押し寄せ、本陣・問屋に押し入って炊き出しを強要し、叫び声をあげながら稲わらに火をかけた。さらに東川田や保科でも飲食を強要したり、屋内に乱入したり、打ちこわしなどをして立ち去った。ここで二手に分かれた群衆の一手が再び川田、松代方面に向かって立ち戻ってくると、これを知った問屋主人・西沢又右衛門は本陣・高札場で押し止め、押し寄せる群衆を説得し、身をもって阻止した、との言い伝えがある。このことは、藩から高く評価されたという。

⑩西沢邸



川田宿のほぼ中央にあり、本陣・問屋であった。旧主屋は明治2年(1869)の火災で焼失したが、明治30年代に再建され、風格ある書院造りの「上段の間」の御殿がある。高札場から眺望する景観は、古町宿(旧川田宿)から移築された長屋門を中心に、土蔵造りの二棟の建物が連続する山並みのような姿を形作っている。この両側の荷蔵の屋根は、土蔵の土塗り屋根を保護するために、その上を更に覆った鞘(さや)屋根になっている。平成20年(2008)「長野市景観重要建造物」に指定された。

※長屋門・・・武家屋敷や豪農の家に見られ、両脇の屋根の間に開いた門。
門番所を兼ねた門でした。

※さや屋根・・・土蔵の屋根を保護するため、屋根の上に更に覆った合掌型の屋根
(二重屋根)

問屋場とは

問屋場は宿場でもっとも重要な施設でした。問屋場には大きく2つの仕事があった。一つは人馬の継立業務で、幕府の公用旅行者や大名などがその宿場を利用する際に、必要な馬や人足を用意しておき、彼らの荷物を次の宿場まで運ぶというもの。もう一つが幕府公用の書状や品物を次の宿場に届ける飛脚業務で、継飛脚（つぎびきやく）という。

これらの業務を円滑に運営するために、問屋場には宿場の最高責任者である問屋（といや）、問屋の補佐役である年寄（としより）、事務担当の帳付（ちょうづけ）が詰めていた。またその下に、人馬指（じんばさし）とか馬指（うまさし）といった、人足や馬を指図する役職を置いていた宿場もあった。この他にも、参勤交代の大名行列などを宿場の出入り口で出迎えるための迎役（むかえやく）といった役職を設けていた宿場もある。

問屋場は一つの宿場に一カ所だけとは限らず、一つの宿場に複数の問屋場があった宿場もある。このような宿場では、交替で業務を担当していた。

幕末から千曲川通船に関わった西沢家は、越後から運び入れた多くの海産物や日用雑貨の卸売りを手掛け、松代はじめ飯山、中野、須坂などへ販路を拡げた。

明治5年には50石船が26艘、砂船が12艘あった、との記録がある。

せきざきかし
関崎河岸へと運ばれてきた船荷は、問屋・西沢家の荷蔵に運び込まれ、善光寺や松代城下をはじめ各地に送り届けられた。

長野市景観重要建造物の指定

長野市では、良好な景観の形成に重要な建造物を景観重要建造物として指定している。平成20年5月1日の指定以降、市内で7件の指定物件がある。

指定物件の所有者には、現状の維持に努めるとともに、もし変更する場合には許可を受けてもらう必要がある。また、必要に応じて所有者の方に対し、技術援助や助成などを行っている。

現在の指定物件の7件は以下のとおり

※	指定番号第1号	藤屋旅館	善光寺中央通り沿い
※	指定番号第2号	中澤時計本店	善光寺中央通り沿い
※	指定番号第3号	八田邸	松代
	指定番号第4号	西澤邸	若穂川田
※	指定番号第5号	北村邸	若穂川田
※	指定番号第6号	宿坊極意（ごくい）	戸隠中社
※	指定番号第7号	越志（おし）旅館	戸隠宝光社

※印は、国の登録有形文化財にも指定されている。

⑪北村邸



松代から福島宿への宿場町として栄えていた川田宿の地主。二つの土蔵を連結した長屋門は明治中期に建てられたものである。母屋は小布施の酒屋を移築したものといわれ、殆んど釘は使われていない。土塗り壁と黒く塗られた下見板、腰板、外壁の二つの土蔵を連結した長屋門が道路に面している。長屋門西側の土蔵の二階には土蔵扉があり、その直下には、大正時代の郵便局舎として使われていた頃の「むくり屋根」が残されている。平成 20 年(2008)「長野市景観重要建造物」に指定された。

注) 川田宿のかつての地主で、長屋門は明治中期、母屋は明治 20 年(1887)に建てられた。まだ解読されていない古文書も数多く伝わっており、今後の解読調査によって新たな歴史の発見が期待される。

むくり屋根について

屋根の種類には、切妻（きりづま）、入母屋（いりもや）、寄棟（よせむね）、方形（ほうぎょう）など様々な形式があるが、屋根面の形によっても大別できる。

屋根面がまっすぐなものは「直線屋根」、反っているものを「そり（反り）屋根」、ふくらみを持ったものを「むくり（起り）屋根」という。

そり屋根は寺社仏閣・城郭に多く、むくり屋根は数寄屋や茶室に見ることができる。有名なものに「桂離宮」がある。いずれも視覚的な効果を目的にしたものである。

そり屋根は、中国からもたらされた建築様式で格式や荘厳さを表し、むくり屋根は格式や厳めしさを抑えた表現としてそり屋根の後に現れたものである。

また、日本は雨が多いが、雨後は屋根の上方（棟）から乾きはじめ、屋根の先端部＝軒先は水が溜って乾くまでに時間がかかる。むくり屋根は、軒先ほど勾配が急になるため、早く水を落とすことができ、軒先に水がたまって腐食しやすくなるのを防ぐという機能もある。

国登録有形文化財・長野市景観重要建造物の指定

川田宿場を象徴する建物であることから、平成16年（2004）に国登録有形文化財、平成20年（2008）にはご本陣・西沢家の門、土蔵とともに「長野市景観重要建造物」に指定されている。

主屋（木造2階建、瓦葺、建築面積216㎡）

旧川田宿の中心地に建つ木造2階建、切妻造、棧瓦葺の居宅。棟札より近隣の大工中條豊吉の手により建てられたことがわかる。北側を正面とし、2階部は当初養蚕のために用いられていたが、近年居室に改造された。明治期の宿場の景観を今日に伝える建築である。

門（木造2階建、瓦葺、建築面積83㎡）

敷地北側に局舎と並んで建つ。土蔵造2階建で、屋根は切妻造、棧瓦葺とする。西寄りに小庇を掛け、門口を開き、腰部は板張、上部に小窓を設ける。内部は倉庫として用いられ、戦前までは主として米を収めていた。良質の土蔵造長屋門建築の好例である。

局舎（木造2階建、瓦葺、建築面積59㎡）

敷地北側西寄りに建ち、東側を門と接する。土蔵造、棧瓦葺で、置屋根形式とする。大正中頃から昭和14年頃まで郵便局舎として用いられ、北面東寄りの庇はその当時入口が設けられていた名残である。街路に面する土蔵として、近代の集落景観を今に伝えている。

⑫旅籠「和泉屋」



川田宿では、本陣向かい側に東から和泉屋、中屋、扇屋の三軒の旅籠が軒を並べていた。街道に面して間口十間、奥行き五間の瓦葺き総二階建ての旅籠が「和泉屋」で現在の橋本家住宅である。二階の外壁に残された、漆喰で浮彫された屋号「和泉屋」に往時の面影が偲ばれる。また、高級武士の宿泊には、部屋数も多く設備の整った和泉屋が利用され、脇本陣に準ずる役割を担った。橋本家からは近年「内国通運 川田継立所」と記された古い看板が発見され、宿場の跡が刻まれている。

注) 内国通運は、現在の「日本通運」の前身である。

注) 本町通り沿いだけでも 30 軒くらいあり、大人数の宿泊者がある時は、その家々も「宿泊所」として宿になった、と言う。

「旅籠（はたご）」と「木賃宿（きちんやど）」

江戸時代、一般の旅行者が宿泊する施設には「旅籠」と「木賃宿」があった。

旅籠と木賃宿との違いは、食事が付いているか付いていないかの違い。旅籠では夕食と朝食を出し、店によっては昼食の弁当を出すところもあった。一方、木賃宿は、旅人が米を持参し、薪代を払って自分で米を炊くかまたは炊いてもらう。「木賃」とはこのときの薪の代金、つまり木銭(きせん)を意味している。江戸時代以前には木賃宿が宿泊の本来の姿だったが、庶民の旅が盛んになるにしたがい、次第に旅籠が増え、宿代も天保年間(1830～1844)には旅籠は木賃宿の5倍以上もするというので、木賃宿は安宿の代名詞となっていた。場所も宿場のはずれなどにあった。

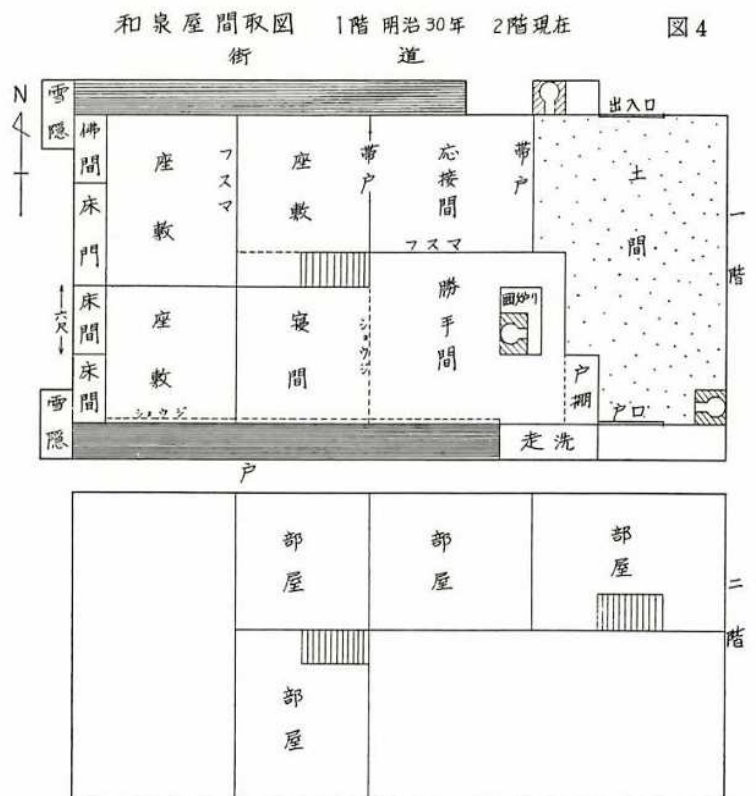
当時の旅籠の宿泊代は夕食と朝食付きで 200 文・5,000 円ほどであった。ざる蕎麦一枚が、16-20 文で 400-500 円だった。宿の食事は夕食よりも朝食の方が豪華だった。健脚な男性の場合は、1日で10里(約39km)歩いたので、その腹ごしらえもあったと考えられる。成人女性や子供は1日6-7里くらい歩いた。そのため、夜明け前の4時から6時頃出発していた。

※江戸時代の物価 「4文=100円」がひとつの目安

江戸時代の物価上昇はきわめてゆるやかで、96文で100文として扱う習慣があったので物の値段は4文の倍数になることが多かった。

例) そば・うどん、わらじ…16文、髪結い…28文、酒一升…250文

※「暮れ六つ(午後6時頃)泊まりの七つ(午前4時)立ち」



⑬口留番所



松代藩が他藩との境界や交通の要所に設けた見張り場所の一つ。川田宿は、須坂藩との境、千曲川・関崎の渡し、大笹街道・保科道(群馬県に通じる街道)の起点であるなど、領内に20置かれた番所の中でも特に重要視された場所であった。番所では、街道を通る人や物の出入り、特に女人の出入りと漆実(うるしみ)の持ち出しを厳しく取締まったほか、夜間には宿場内や渡し場の見廻りなど、油断なく警固していた。今は石柱が建つのみである。

注) 松代藩では寛永2年(1625)に領内20カ所に口留番所を設置した。

注) 北島家の土蔵には、寛保2年(1724)「戌の満水」時の水付きの跡が土蔵の内部に残っている、とのこと。

松代藩内に置かれた口留番所 20カ所

- ①関屋口（松代町豊栄） ②鼠宿村（坂城町） ③仁礼口（須坂）
- ④川田口（若穂川田） ⑤田野口（信更町田野口）
- ⑥有旅口（長野市篠ノ井有旅） ⑦田原口（千曲市桑原）
- ⑧桑原口（千曲市桑原） ⑨聖口（長野市大岡）
- ⑩市後（いちご）沢口（大岡） ⑪橋木口（信州新町）
- ⑫小市口（安茂里小市） ⑬腰村口（西長野） ⑭上ヶ屋口（芋井上ヶ屋）
- ⑮吉田口（吉田） ⑯橋場口（信州新町） ⑰宇内坂口（新町）
- ⑱桐山口（小川村） ⑲立屋口（小川村） ⑳日影口（小川村小根山）

・川田・・・松代通り、関崎の渡し、大笹街道保科道
千曲川を渡る関崎の渡しと須坂領への人と荷物の改め（確認）
をしていた。

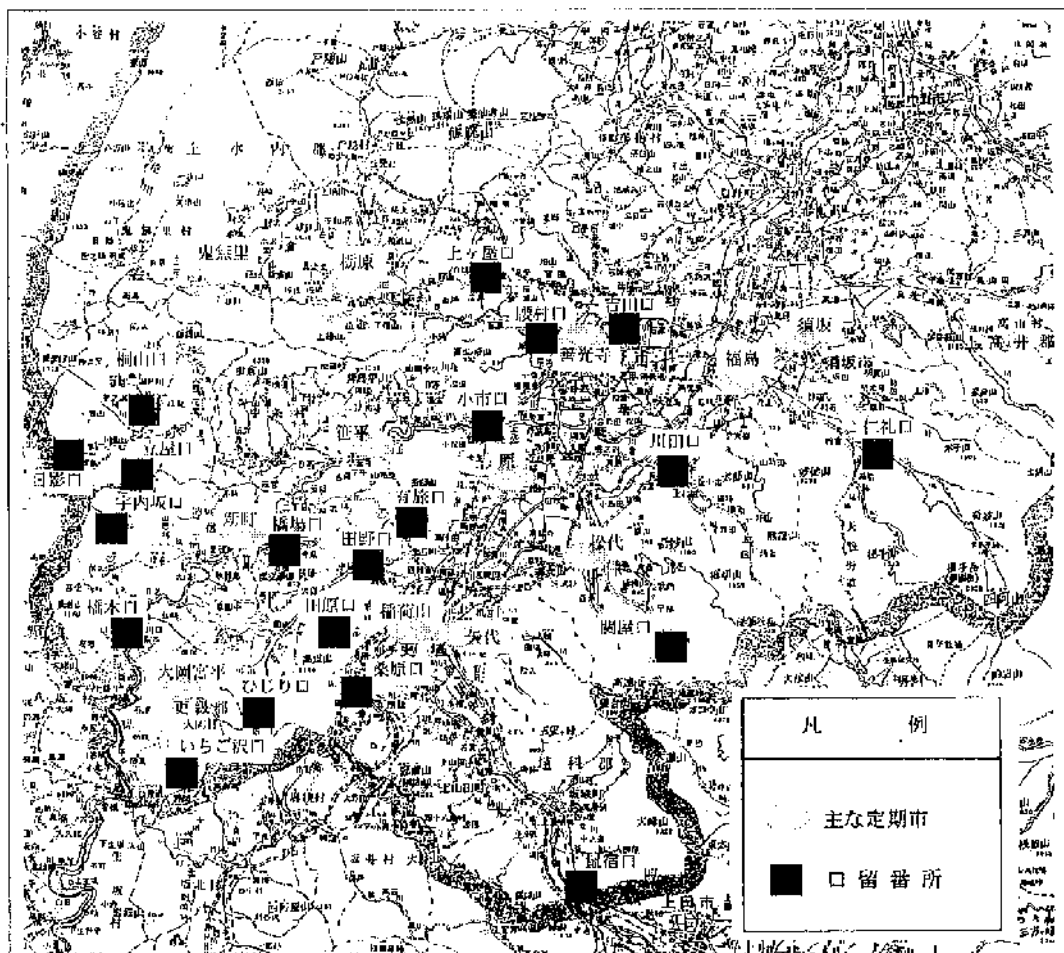


図7 松代領内の口留番所

出典：『長野市誌第三巻 歴史編 近世一』より

番所の三道具 ～刺又・突棒・袖搦

「番所の三道具(みつどうぐ)」とは、刺又(さすまた)・突棒(つくぼう)・袖搦(そでがらみ)の三種類の捕り物用の道具(捕具)の総称である。



(写真は左から突棒、袖搦、刺又)

ろうそくの原料となった漆実(うるしみ)

漆の実(うるし)は「蠟分(ろうぶん)」という成分を含み、江戸時代から昭和 30 年代までこの蠟分を絞り出して蠟燭(ろうそく)や髻付油(びんつけあぶら)などの原料として用いられた。髻付油(びんつけあぶら)は日本髪を結う時に髪型を整えるための整髪料のことで力士の髷(まげ)を結う時に使われるものである。漆の蠟燭は普通の蠟燭よりもオレンジがかった色の火に見える。

江戸中期以降になると、灯りの燃料として油菜が栽培されるようになり、同時に櫨(はぜ)や漆の実を使った木蠟(もくろう・和ろうそく)が諸藩の産業として発達した。

こじょうさん 古城山に登ろう！ ～むかしの山城探検～

この山城は戦国時代のころ、このあたりを治めていた 川田対馬守(かわだつしまのかみ) の居城だったと言われています。
居城といっても普段から住んでいたのではなく、川中島平一帯の見張りや非常時の場合に立てこもって戦うための城だったようです。
城跡である頂上は広く平らになっており、坊備のための空堀跡も見られます。
川田小学校近くには「古屋敷(ふるやしき)」や「古城(ふるしろ)」という地名が残っており、川田氏の居館があったと言われています。

※所要時間は往復で約2時間ほどです。
道が悪く、急な斜面やロープづたいで上る場所があるのでご注意ください。

川田宿から見た古城山



北 ↓

0 70 140 280 420 560

⑭錦ヶ池



永禄4年(1561)、川中島合戦の帰途についた上杉謙信はのどの渴きを覚えて村人に尋ねてこの池を教えられる。ここに馬を休めた謙信に家臣の和田喜平太は錦の陣羽織を以て、この池の水を汲み上げて献じたことから、「錦ヶ池」と名付けられた。また、謙信ゆかりの名馬にちなむ駒爪の石は、もはや池の中に姿を消してしまった。

“武士(もののふ)の衣の錦池水に
映して澄める花紅葉かな”

上杉謙信にまつわる伝説が残る池

川田村誌には、「錦ヶ池、官有に属す、方六尺、反別一步、西部芝原山の麓、北国街道の側にあり、水性淡白にして最も茶水に適す。永禄4年8月、上杉謙信川中島にて軍利を失い越後に逃亡の帰路、渴に堪えず里童に問い、家臣和田喜平太、錦の陣羽織を以ってこの水を汲み揚げ与えしより錦ヶ池という。また、側に駒爪の石あり謙信の名馬、連銭芦毛の駒の爪痕ありしと里語に云い伝う」とある。

この謙信ゆかりの名馬にちなむ駒爪の石は、もはや池の中に姿を消してしまっている。



⑮町川田神社の常夜燈



八丁村の豊田新治良さんは関崎の渡し場で誤って千曲川に転落。周囲の人々に助けられ九死に一生を得た。日頃から信仰心が篤かったので、仏の功德に感謝して関崎の長覚寺へ常夜燈を寄進した。文政8年(1825)のことである。火袋石の大きな傷みは善光寺地震の傷跡か、宝珠石も無くなっている。町川田神社へ移されたのは、いつの時代か、どんな理由があったのか定かではない。

注) 文政8年(1825)10月と記された塔には、「大本願」西沢又右衛門、西沢大次良、「世話人」当所和田喜右衛門・青柳彦三郎、八丁村 関野常吉他四人と刻まれています。常夜燈に刻まれた「大本願」「世話人」の方々は石塔を造立することを発願して、その費用を負担する人々でその報いによって仏の「功德」を受けることが出来るといわれ、古代、中世においては願として塔を造立した人々は、上層階級に属する貴族、上級武士、農村の名主層の人々で、庶民は結縁者の人々が参加されていたといわれている。

〈常夜燈に刻まれた文字〉

(裏) 長覚寺 ■慶法印台

(右) 大本願 西沢又右エ門 西沢大次良

(左) 施主 八丁村 豊田新治良

(台石・左) 世話人 当所 和田喜右エ門 青柳彦三良

八丁村 関野常吉 鈴木宗吉 伊藤弥吉

町田乙右エ門 村石藤治良

(台石・右) 当所石工 片桐栄治良 高橋村 鳶方 源蔵

出典：『長野市の石造文化財（第三集）』より

※長覚寺…江戸末期まで、関崎入口の武内さん宅にあった寺院。松代の皆神山和合院の末寺で、修験道と関係のある寺院だった。

武内家には、修験道の開祖と言われる木製役行者像、法印免許状、修験道の呪い書等が伝わっており、庭には石造大日如来坐像や墓誌、長覚寺由緒碑がある。

町川田神社

諏訪明神、建御名方命(たてみなかたのみこと)を祭神とし、明治9年(1876)に「諏訪宮」より改称した。境内は、南方の山を背にした傾斜地に本殿、祝詞殿、拝殿が直線に並び、参道東側に弥栄社、神庫、社務所を配する。弘化4年(1847)の善光寺地震で、石造鳥居が倒壊したとの記録がある。

町川田神社の御柱祭

7年に一度(寅年と申年 ※善光寺御開帳の翌年)行なわれる諏訪大社の御柱祭に合わせて町川田神社においても行われている。

確認できる最古の記録は、昭和7年(1932)の御柱祭古写真である。(ガイドマップ地図の右下の写真) 近年では、平成22年(2010)に行われている。

御柱祭では、祭典の1週間前に寄進を受けた神木大小2本の伐採・山出しを行い、上組・下組の宿主宅前に注連縄を張って安置する。

当日は早朝に各宿主宅前で神前祭を行い、里曳きの出発地点まで2本の柱がそれぞれ曳いていかれる。その後、2本の御柱が一緒になって里曳きが始まる。里曳きは大麻(おおぬさ・お祓い時に使われる棒)を持った氏子総代に続いて神官、宿主等の後ろから共楽社と祭典連の若衆組が壱の柱(上組)、弐の柱(下組)と呼ぶ御柱を曳いていく。木遣り歌やラッパが鳴り響く中、奉納者の小学生男子が乗り、御供餅を振りまく御供俵、富札をまく富の山車と続き、笛や太鼓の道中囃子が最後を飾る。宿場内の下組、上組の秋葉社前では神楽が奉納され、町川田神社に到着後、木遣り歌の中、立て御柱となる。



町川田神社の御祭礼・祇園祭

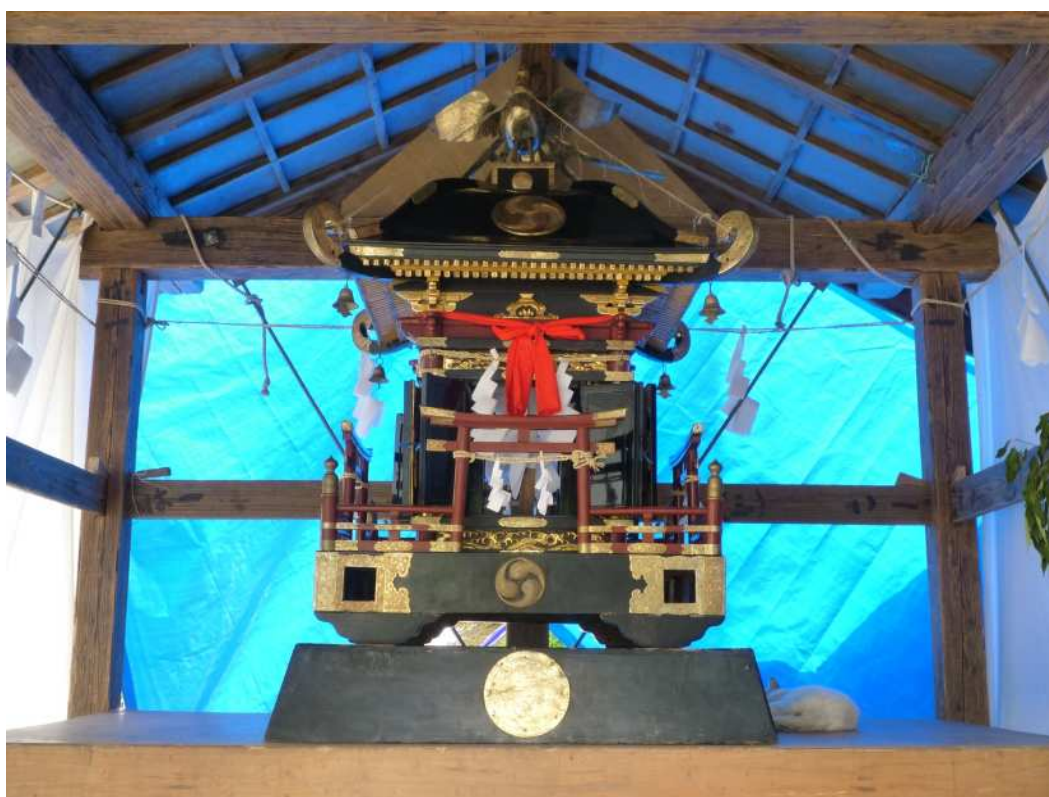
川田宿では、毎年7月16日から23日までの一週間、町川田神社にある弥栄社のお祭り・御祭礼が行われている。

御祭礼・祇園祭は、^{すさのおのみこと}素戔鳴命（^{こずてんのう}牛頭天王）のお祭りで、初日の「天王下ろしの日」に川田宿本町通り・北村家住宅前に天王さんを祀る「お仮屋」が組み立てられ、天王さんが安置される。天王さんは神事後、町川田神社から川田駅に向かい、そこから御仮屋へと練り歩いた。

一週間の間は、御仮屋にお賽銭箱が置いてあり、お参りする人や子どもたちが御仮屋に上がって遊んだりします。

最終日の天王上げの日は、川田駅へ移動後、太鼓を先導に下横町～本町～町川田神社へと村中を練り歩き、神事を行なって収納する。昔、担ぎ歩いた道中では、家々から胡瓜やお賽銭が天王さんに供えられ、この胡瓜は途中途中や町川田神社で集った人たちが皆で切って食べたが、現在では台車わしつらえて乗せている。

本町通り・北村邸前の「御飯屋」写真



⑩関崎の渡し



川田宿と川中島平を結ぶため、千曲川に設けられた松代藩公設七渡しの一つ。夜間には、松代城下側に渡し舟を繋ぎとめることを義務付け、防備を固めていた。この渡しは、川田宿から保科道を経て大笹街道に通じて江戸へと至る交通の要所に位置する。また、松代松井郷の古地図には、関崎の地に「関所」と記されており、早い頃から川と陸とを結ぶ要衝であったことがうかがえる。

注) 舟渡しの時間は、明六ツ（日の出）から暮れ六ツ（日没）までで、この点はすべての渡しに共通しているが、七渡しではその日の最後の舟は必ず右岸、火急の用に備えるため松代に近い岸に繋いでおく定めであった。

松代封内（ほうない）七渡しと野渡し場

江戸時代、千曲川中下流において現在のように橋を架けて渡ることは技術的に不可能であり、渡し舟で渡っていた。

北国街道の渡しで、松代藩領内には「松代封内（ほうない）七渡し」と呼ばれ、藩が重視した「渡し場」が七ヶ所あった。

松代封内（ほうない）七渡し 一覧

渡し	川	機能	舟数	水主の数	備考
矢代	千曲川	北国街道（善光寺街道）	1 艘	8	
赤坂	千曲川	松代城下－川西領内	1・御用船 1	6	
寺尾	千曲川	松代城下－川西領内	1	6	
関崎	千曲川	松代城下－川西領内	1	4	
布野	千曲川	北国街道（松代通り）	1・囲い舟 1	12	
市村	犀川	北国街道（善光寺街道）	2・囲い舟 1	15	
小市	犀川	市村の渡しの補助	1	6	

※御用舟は藩主とその家族専用、囲い舟は予備の船

※水主の数には船頭を含む

野渡し場

松代藩が北国街道と領内支配のために設けた前記「七渡し」のほかに、「野渡し場（先場渡し）」といって野良仕事や入会山への往来をはじめ、住民の暮らしのために村々が設けた渡し場もあった。

千曲川・・・網掛、力石、若宮、千本柳、向八幡、杭瀬下、岩野、中澤、牛島

犀川・・・日名、下市場、水内、笹平、大豆島

渡し場の運営

渡しを利用する村々は、渡し賃に渡し場と舟の維持管理費用を含めた「繋ぎ糶」を出していた。繋ぎ糶は一年分として納められ、これにより納めた村々の人々は無料で乗船することができた。「繋ぎ糶」は、もみ米や大豆の他、金銭で納入した村もあった。それ以外の利用者からは船賃を徴収した。

船賃は、一渡し（川瀬が一筋）ならば平水時 10 文、出水時 22 文、二渡しならば平水時 30 文、出水時 39 文という規定であった。

特に市村の渡しの場合は、寛保 2 年（1742）の「戌の満水」以後格段に水難が多く出費過大のため 2 割増しが認められ、この特例は文化 2 年（1805）まで続いた。

ここ関崎の渡しでは、今里村の場合、戸部村の場合（ともに今の川中島地区）、ともに「繋ぎ糶 1 俵」を納めていた。

渡し別「繫ぎ粃」一覧

村 渡し	今里	戸部	塩崎	荒木	千田	上ヶ屋	鬼無里
矢代	2 俵	10 俵	家別集	200 文	200 文	銀 2 匁	200 文
赤坂	2 (1) 俵	7 俵					300 文
寺尾	2 俵	4 俵	1 俵	100 文		2 俵	200 文
関崎	1 俵	1 俵					
布野				240 文	200 文	銀 3 匁	
小市	家別集	5 俵	3 俵	124 文	200 文	銀 5 匁	2600 文
市村	2 俵	6 俵	11 俵	1532 文	800 文	2 石 4 斗	600 文
笹平	2 俵	3 斗					500 文
裾花	1 俵		200 文	300 文	200 文	200 文	

※各村は一年分をまとめて納めていた。

※例えば鬼無里のように麻や綿など特産物の販売代金で納める村もあった。

高井・更級・埴科三郡境界の石

関崎下流、千曲川右岸の河川敷に人頭大ほどの石がある。言い伝えでは、この石は「高井郡、更級郡、埴科郡の三郡の境を示す石」という。高井郡は若穂川田、更級郡は真島、埴科郡は大室の境界である。

関崎には「四郡畑」と呼ばれる畑があり、その畑の中に水内郡を含めた四郡の地籍があったという。（「飯島家記」）

また、『長野県町村誌』には、大室村に天然の三面石で、長さ八尺（2.4m）、幅一尺六寸（48cm）の郡境石があったという。石の北面は高井郡、南面は埴科郡に向かい、西面は更級郡に向いていたという。

昔から河川は郡や村の境として意識されてきたが、堤防のない時代には、河川の流路は大きく変化した。この境界石は、移動する河川に対して不動の印として置かれた。

大笹街道・保科道

南に菅平を控えた若穂保科地域は行き止まりではなかった。江戸時代の保科には、菅平、大笹、草津、倉賀野（現在の群馬県）へ向かう旅人や荷物が通り、江戸や東国からは善光寺参りの旅人が大勢行き交った。

現在の群馬県嬬恋村の大笹宿を通る道は「大笹道」・「大笹街道」と呼ばれ、中山道と

北国街道の脇往還であった。善光寺平から大笹宿に至る道は仁礼、保科、松代地蔵峠越えの三本の道があった。その出入り口の仁礼、川田、関屋には松代藩の口留番所が置かれて旅人や荷物を取り締まっていた。

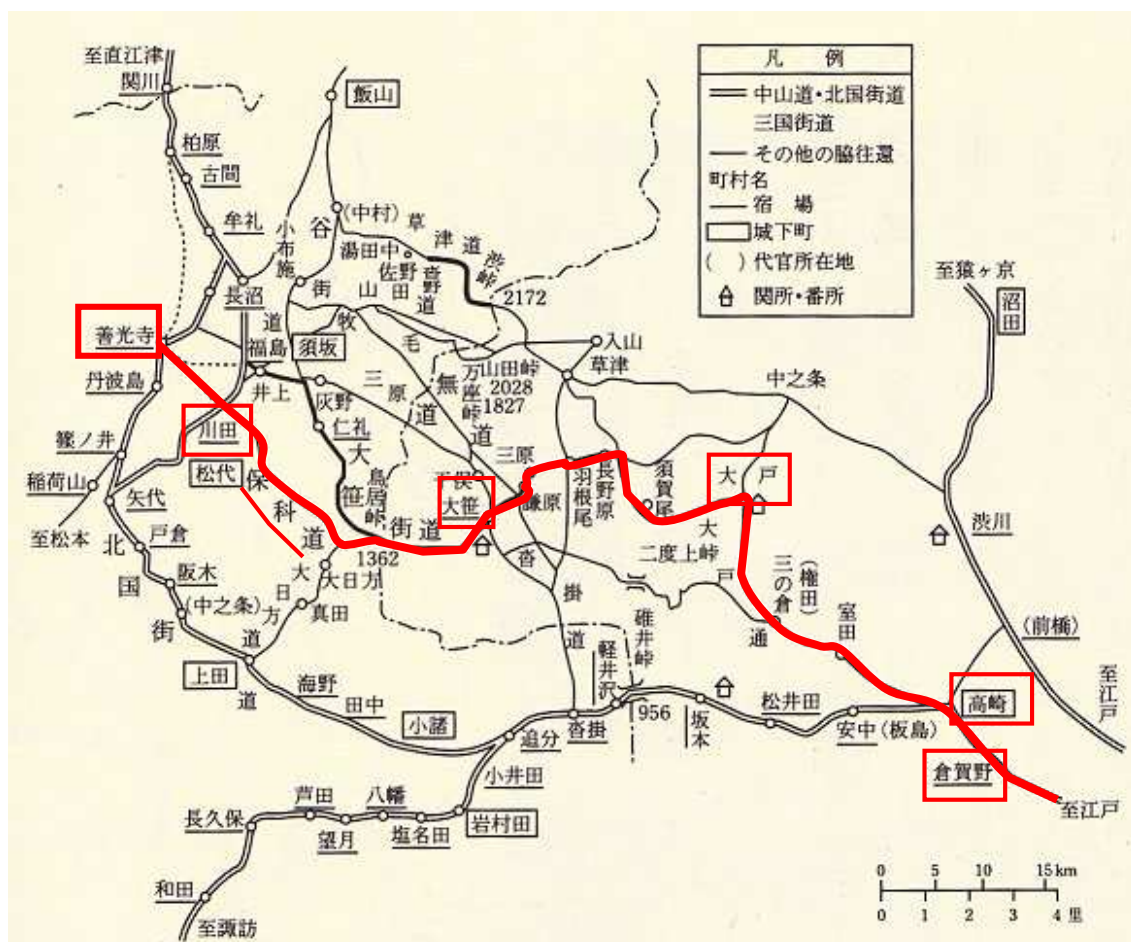
大笹道は鳥居峠―大笹―須賀尾―大戸―高崎―倉賀野に通じ、中山道の碓氷峠越えより10里余り(40km余り)も近道であった。しかも江戸に運ぶ荷物は倉賀野河岸(かし)から鳥川を経て利根川に合流して江戸へと船で運搬できたため、松代以北の松代・須坂・飯山諸藩の江戸への廻米なども馬に乗せてこのルートで運ばれていた。

大笹は月六回市(いち)が開く六斎市が立ち、吾妻郡西部では多くの人や物資が行き交う最も経済活動が盛んな宿場であった。ここには信州からは米・菜種油や塩が運ばれた。

国境の鳥居峠は江戸で灯火具の油として使われた菜種油が大量に通過したことから、「油峠」という別名があるほどである。

宿場内にある道標には、右側面に「沓掛街道」、左側面に「沼田草津道」と刻まれており、ここは倉賀野ばかりではなく、軽井沢の沓掛や草津、沼田へもつながっていた。

10里の短縮は、旅人にとってほぼ1日分の行程短縮だったため、この道を通して善光寺参りをする旅人も多かった。



⑰関崎の常夜燈



川田宿の西口関崎の千曲川河畔に大きな常夜燈が建てられている。この常夜燈は、保科清水寺の観音講中が参拝者の安全を祈って寄進したもの。台座には、当所の世話人10名と近郷近在28ヶ村の村名と共に世話人45名の名が刻まれている。多くの人びとによって建立された常夜燈は、道中奉行の許可を要し、夜毎灯を点す役目を担った人々に守られ、関崎の渡しを照らす灯台であった。

常夜燈（じょうやとう）とは

一晩中つけておく明かりのこと。転じて街道沿いなどに設置されている建造物のことも指すようになった。夜道の安全のため、街道沿いに設置されている常夜灯は、現在で言う街灯の役目を果たしており、街道の道しるべとして設置されているものが多い。港町などには灯台の役目をした大型の常夜灯が設置されている。集落の中心や神社などの常夜灯は信仰の対象として設置された。ろうそくや菜種油を燃やして火をつけていた。

〈常夜燈に刻まれた文字〉

（竿石・左）清水観世音

（第一台石・正）当所世話人

駒村久助 奥野健左工門 松沢弥惣治 元田團蔵
伊藤彦四郎 小林喜代治 坂口和三郎 小林長左工門
中嶋富八 橋本九左工門

（第二台石・正）世話人 八幡村 和作 平柴村 要治良 幸三良 茂作

東福寺村 中■ 八之丞 同上組 谷右工門
赤野田村 大太郎 菊之■ 下和田 乙三良
領家 林三郎 小川西村 永三良
中条村 清吉 松代■村■ 源十郎
高田村 平左工門 釜屋村 助作 水沢村 佐金太
上小島田村 藤作 上氷鉋村 近也
下氷鉋村 太兵工 八五郎 丹波島村 清五郎 常右工門
青木島村 半蔵 三右工門 小布施村 十役人中
高橋村 幸右工門 ■町 人五郎 上庄村 岸右工門
小森村 喜助 西条村 友右工門 又三郎
上和田 勇右工門 福原村 團右工門 米持村 宗三郎

（竿石・裏）花粒山十八世大輝代建之

（ ・右）民右工門 北村専治

（ ・左）川合 ■村惣五郎 ■村民蔵

出典：『長野市の石造文化財（第三集）』より

交通の要衝だった「関崎の渡し」

川田宿の西口関崎の千曲川河畔に大きな常夜燈が建てられている。この地の川岸には「関崎の渡し」があり、北国街道松代通りの川田宿から善光寺道、保科清水観音から大笹街道・保科道の分岐口としての交通の要地であった。

南に菅平を控えたこのような由緒ある場所に参詣人の行路の安全と無事を願って、村々の観音講の人々によって常夜燈が寄進されたと伝えられています。常夜燈の台石には当所の世話人 10 名と近郷近在村々の青木島村、丹波島村、赤野田村、小布施村など 28 ヶ村の村名と 45 名の世話人の名前が刻まれている。

多くの人々によって建立された常夜燈は道中奉行の許可を要し、夜毎灯を点す役目を担った人々によって守られてきた常夜燈でした。そして関崎の渡しを照らす灯台でした。

保科観音・清水寺

「保科のお観音さん」あるいは「ぼたんのお寺」として親しまれている阿弥陀山清水寺は真言宗智山派に属し、天平 14（742）年の開基。大正 5 年の大火に見舞われたが、坂上田村麻呂が納めた日本最古といわれる「鉄鍬形」、両界曼荼羅図や聖観音菩薩立像などの重要文化財が保存されている。また、信濃三十三番札所のひとつ、十六番札所でもある。

全国には、京都の清水寺と同じく坂上田村麻呂の伝承を持つ「清水寺」が数多くあるが、保科の清水寺はその規模の壮大さと歴史から言っても他の追隨を許さない。

延暦年間（782～806）、田村麻呂が東征からの帰途、この地に堂宇を建立、みずから刻んだ八将大権現を寺の鎮守とし、自身の兜の「鉄鍬形」と直刀ひと振りを奉納したとの伝承が残っており、所有の国重要文化財「鉄鍬形」がその兜であるという。以来、寺運栄え、鎌倉期建立の大日堂、三重塔をはじめ、七堂伽藍や多くの僧坊が並び立った。

保科の大火によって一山灰燼に帰したのは、大正 5 年のこと、ただちに復興事業が開始された。本堂、客殿の再建、次いで奈良石位寺から千手観世音菩薩ほか七体の仏像（藤原中期作・国重要文化財）を勧請し、諸堂を再建した。

二千株のぼたんは東洋一といわれ、「牡丹寺」ともいわれる。4 月上旬頃のしだれ桜、5 月上旬頃のぼたん、りんごの花、11 月中頃には、観音堂に続く石段の両側に鮮やかな紅葉が連なり、写真愛好家が大勢訪れる。「もみじ祭り」では、石段の燈明が幻想的な空間を演出している。

亀岩堤防の工事

「亀岩堤防」は、旧関崎橋跡の「亀岩下」に構築されている千曲川堤防である。

『川田村誌』には、「千曲堤塘は千曲川に沿い字関崎の坂、亀岩より起り東北へ斜にして字外新田に至る・長さ八町三十二間（約 930 メートル）馬踏二間三尺或いは六尺・敷八間或いは三間三尺、修繕費は民費に属す」と記されている。

ここ関崎の地は古くから水害発生の危険箇所であり、特に明治 30 年、31 年と連続して襲った千曲川大洪水では、この亀岩堤防が決壊、濁流がまたたく間に、下流 1 町 15 カ村を襲い、甚大な災害をもたらしたといわれている。

このような水害被害を未然に防ぐため、翌明治 32 年（1899）、亀岩堤防の大護岸工事が国の事業として行なわれた。工事は同年 1 月から 11 月にかけて、わずか 9 ヶ月で大堤防が完成した。

常夜燈の脇には、堤防工事竣工の記念碑が立てられている。

「関崎の常夜燈」にまつわる伝承(エピソード)

- ①幕末の松代藩士・佐久間象山が湯田中の開発や藩内の巡視で度々ここを往復した折、近くの石工・栄治郎方に休息し、杯を傾けながらこの常夜燈の眺めを賞賛し、一詩を賦して栄治郎方に贈ったという。
- ②戊辰戦争の際、「旧幕府勢力が飯山城から松代城下に向かう」との情報があり、この常夜燈脇に大砲 3 門を据え付けて守りを固めたという。
- ③木下恵介監督作品の映画「笛吹川」のロケ地となり、旧関崎の木橋と常夜燈の風景が撮影された。1960 年作。
長野の地では、『野菊の如き君なりき』（1955 年）、『風花』（1959 年）、『笛吹川』（1960 年）の 3 本の映画を撮影している。

⑱千曲川通船



千曲川通船は松代藩の支配下におかれ、流域産物の交易に当たり、川田河岸は関崎の渡し船場を兼用し、船荷は問屋(西沢家)の荷蔵に収められた。船荷は、越後からの塩、砂糖、魚、海草、お茶、金物、呉服等が運ばれ、これら品々は飯山、中野、小布施、須坂、川田、松代の北信一帯から上田方面まで流通した。また、通船荷を川田河岸から赤野田を経て、東信地方へ送る洗馬道の改修案は実現に至らず、幻のバイパスとなった。

千曲川通船の歴史

重量のある物資や人の輸送には船が大きな役割を果たした。千曲川でも船運の計画がしばしば持ち上がったが、地理的な問題や従来から荷物の陸上輸送に従事していた街道宿駅・問屋などの反対で実現しなかった。

「千曲川通船」が公に認められたのは、寛政2年(1790)年のことであり、西大滝(現飯山市)―福島(現須坂市)間で行なわれた。(太左衛門船)

安政5年(1858)に、川田宿問屋の西沢又右衛門と松代の安次郎が太左衛門から船と通船の権利を譲り受け、通船事業に乗り出した。

この時、又右衛門は3艘の船と通船の関係書類を400両で譲り受け、越後方面から運び入れた多くの海産物や日用雑貨の積荷の卸売りを手がけた。明治期には多くの船を持ち、「船元」として千曲川通船の中心人物となっていた。

明治5年(1872)に長野県に提出した届によると、「五〇石船26艘、砂船が12艘を持っていた」という。同年には、松本と新町村(現長野市信州新町)の間で行なわれていた「犀川通船」の船が千曲川に乗り入れはじめ、明治7年(1874)には、千曲川・犀川通船株式会社が設立されて北信濃全域をカバーする交通網が出来上がった。

この後、千曲川通船は最盛期を迎え、貨物輸送の担い手となったが、明治21年(1888)信越線・直江津―軽井沢間が開通すると通船事業は大きな打撃をうけ、その座を鉄道輸送に譲ることとなった。

幻のバイパス「洗馬道」(せばみち)

明治5年(1872)の中牛馬会社設立を機に、川田宿の河岸(かし)に荷揚げされた通船荷を東信地方に運ぶため、川田宿から東川田、赤野田を越えて洗馬村(現上田市真田町)に通じる「洗馬道」の改修案が計画された。

洗馬道は、川中島平と東信地方を結ぶ最短距離の中馬道であり、この道を荷馬車の通る道とする拡幅案だったが、近隣の村々の入会山のまぐさ場道であり、ワラビや薪など山稼ぎの道でもあったため、意見がまとまらず、実現に至らなかった。

⑱文化財・灰釉四耳壺



この壺は、町川田地籍の芝原山遺跡から出土した鎌倉時代とも推定される灰釉四耳壺である。このような高価なものは、貴族や上級武士、寺院などごく限られた人々の秘蔵品であった。壺は昭和 51 年(1976)7 月 26 日に出土し、高さ 24 cm、直径 18 cmで口辺部が失われているため、原形を知ることが出来ないが、肩部四ヶ所に特有の突起が付いている。東光寺の寺宝であるとともに長野市の文化財として指定されている。

この壺は昭和51年（1976）、町川田地籍、芝原山遺跡から出土した鎌倉時代とも推定される灰釉四耳壺です。

このような灰釉陶器は当時においては非常に高価なもので、貴族や上級武士、寺院などのごく限られた人々の秘蔵品でした。

殊に古くからの交通の要衝と見られる場所から出土する例も多く、中央道の工事中には、辰野町、上伊那芝宮地籍からも同じ型の四耳壺の出土例も見られます。

芝原山遺跡から出土した灰釉四耳壺もそうした故郷の歴史の跡を静かに語りかけているようです。

注）長野市埋蔵文化財指定

②⑩大滝の泉



“北に流るる千曲川、南に聳ゆる古城山、黄金の山の松青く、大滝泉の水清し”と歌われた「大滝泉」。当時は宿場の本町通り中央に、防火用水・馬の飲み水・旅人の足すすぎ水の生活用水として貫流していた用水堰の水源地であった。「大滝」という地名はこの付近の地名の中に、「尾滝」・「小滝」とあり、当時の盛んであった宿場周辺の跡を伝える名残の地名である。

“北に流るる千曲川、南に聳ゆる古城山

黄金山の松青く、大滝泉の水清し”

と謳われた「大滝泉」は、宿場本町通り中央に防火用水、馬の飲み水、旅人の足すすぎ水の生活用水として貫流している用水堰の水源地だった。

近年、「宿場の町おこしに・・・」と誕生した地酒「大滝の雫」はこの泉にちなんだ銘酒である。

嘉永7年（1854）の文書には「当所名所に 尾滝 と申す水交じりの湯、出で候」とあって、疝積（冷え性）に効能ある冷泉が湧いていて焚湯が盛んだったことが記されています。

「大滝」という地名はこの付近の地名の中に「尾滝」「小滝権現」とも記され、盛んだった宿場周辺の跡を伝える名残の地名である。



～保科観音・清水寺～

信濃三十三番第十六番札所… 阿弥陀山 清水寺
ご本尊…千手観世音菩薩（通称:保科観音）
観音安置所…奥の院観音堂
開山開基…天平十四年／742年



御詠歌… かりそめも にごる心を求むなよ 影清水に 月は澄みぬる

「清水の舞台から飛び降りたつもりで」とは一大決心する際によく用いられる慣用句であるが、この句には肝心の言葉が抜け落ちている。前置きとなる「観音さまが背中から見守っていてくださるから…」という部分である。

清水寺はもともと本来観音霊場である。天平 14 年（742）、行基が自ら刻んだ三体の千手観音の一体をこの地に安置したのが始まりと寺伝にあり、延暦 20 年（801）、坂上田村麻呂が蝦夷平定を祈願し、その成就に感謝して伽藍を建立、自ら刻んだ八将大権現を寺の鎮守とし、自身の兜の鉄鍬形と直刀一振りを奉納したとの伝承が残る。清水寺が所持する日本最古の鉄鍬形（国重要文化財）がその兜であるという。

以来寺運栄え、鎌倉期建立の大日堂、三重塔をはじめ七堂伽藍や多くの僧坊が並び立った。

清水寺が保科の大火によって一山灰燼に帰したのは大正 5 年（1916）のことである。ただちに復興事業が開始された。本堂、客殿の再建、次いで奈良石位寺から千手観世音菩薩のほか七体の仏像（藤原中期作 国重要文化財）を勧請し、諸堂を再建した。ぼたん二千株の東洋一といわれる牡丹寺の誕生である。

4月上旬には枝垂れ桜、5月上旬頃からぼたん、5月中旬頃からはりんごの花、11月中旬頃から紅葉が見頃となる。

観音縁日…4月17日

寺行事 …ぼたん祭り(5月初め) ／ 紅葉祭り(11月初め)



出典:『観音さま だいすき ～信濃三十三番札所 みちを歩く』

信濃三十三番札所連合会監修 信濃毎日新聞社 2008 年

～川田周辺の古墳群～

◆ 大室古墳群・北山支群(22 基)

大室古墳群は長野盆地南東の山間地域、松代町大室を中心に同町東寺尾、柴、若穂川田にわたって位置する。約 2.5Km 平方の範囲に 3 つの尾根とそれに挟まれた二つの谷部に分かれて古墳が分布し(総数で 500 余を数える大規模な古墳群である)、その分布状況から「北山」「大室谷」「霞城」「北谷」「金井山」の大小 5 つの支群に大別されている。

北山支群は、古墳群東端の支脈の先端部、古城山(544m)の尾根上を中心に分布。山頂近くに位置する 18 号古墳は大室古墳唯一の前方後円墳(全長 27m)で、「大室滝辺双子塚」とも称される。

◆ 和田東山古墳群 (7 基)

長野市若穂保科の扇状地をのぞむ奇妙山の派生尾根上に立地する古墳群である。昭和 59 年(1984)に前方後円墳 3 基と円墳 2 基が確認され、平成 2 年(1990)からの 2 年間で明治大学による墳丘測量調査が実施された。

標高 414m 付近に位置する 1 号墳は全長 38m、標高 447m 付近に立地する 3 号墳は全長 46m、標高 472m 付近に位置する 4 号墳は全長 43m の大きさがある。平成 4 年(1992)から 6 年(1994)までの 3 年間にわたり、3 号墳の発掘調査を実施、墳丘トレンチからは多量の円筒埴輪片が出土し、後円部からは主体部直上にて壺、高杯、器台などの土器片が出土した。埋葬主体部は未盗掘の竪穴式石室で、天井石が架構されておらず、木材による天井蓋の可能性が指摘される。内部からは、倣製内行花文鏡 1、太刀 1、鉄剣 1、鉄槍 3、鉄鏃 19、やりがんな 2、鉄斧 2、砥石 1、ガラス小玉 40、管玉 8 が出土している。3 号墳の築造時期は、出土遺物から当地域の古墳出現期に遡る可能性が指摘され、1 号墳はこれに先行し、4 号墳は後続するものと推定されている。

◆ 大星山古墳群 (5 基)

若穂川田地区に所在する大星山古墳群は、高速道路建設の土取り造成に先立ち、県の埋蔵文化財センターにより調査された、円墳 1 基、方墳 3 基の古墳群である。

大室古墳群とは尾根の反対側に位置する派生尾根上に立地し、直下の水田面からは約 40 m の比高差がある。4 世紀第 3 四半期の 3 号墳に始まり、4 世紀第 4 四半期の 1 号墳、5 世紀初頭の 4 号墳、5 世紀第 2 四半期の 2 号墳の順に築造されたことが発掘調査から判明している。このうち 4 号墳は、尾根上に並んだ他の 3 基とは若干離れた山腹に位置し、また唯一の石積み墳丘で、埋葬主体部である竪穴式石槨は地山掘り込みによって構築され、斜面下方側には比較的大型の石材が一行に配されていた。合掌形石室が 3 号墳南裾の付属埋葬施設と 2 号墳の埋葬主体部に認められ、特に 2 号墳は箱形石棺状の基部構造上に天井部が一部残存しており、小形の板石を何枚も持ち送り状に重ねて切妻屋根形にしていることが想定される。

川田八景とは

- ・ 王子塚の観月（領家）
- ・ 堤池に遊ぶ水鳥（小出）
- ・ 東光寺の蓮池（町川田）
- ・ 蓮生寺の梅花（牛島）
- ・ 関崎の激流（町川田）
- ・ 長田神社の杜（大門）
- ・ 萬福寺の湧水泉（塚本）
- ・ 皇太神社の老幹弓なりの松（領家）